

十二月十四日

毎日新聞に「生きる者の記録」の連載が再開された。萩尾信也記者。末期がんの佐藤健の死の床に最期まで付き添いルポルタージユを続けた記者だ。先日池尻での佐藤健の会でも久し振りに会った。今回の記事は盲目の八〇才の青木優牧師の生き方を追うものようだ。佐藤健の短い生涯は阿弥陀の来た道の探求で終わってしまった。佐藤健の後継者になるやも知れぬ萩尾信也が「生きる者の記録」をキリスト者を追う事で再開したのは良く解る。編集局長他もさぞかし知恵を絞ったのであろう。宗教を扱う事に経験が多い毎日ならではの配慮が感じられる。

第一報は少しばかり荒いが歯切れも良く及第だろう。仏教の無常、キリスト教の構築を医師の卵だった青木氏が牧師になってゆく道筋とダブらせて書ければ凄いいルポルタージユになるだろう。萩尾記者は阿弥陀、つまり浄土真宗の教えの中で死こそ光であるというのを良く知らずに、佐藤健の死の床での「生は光、死は闇人間は一瞬の流れ星だ」というつぶやきを、そのまんま記事にして、浄土真宗の僧侶である馬場照道と「あの佐藤健がそんな事言うわけない。訂正記事出せ」「イヤ、健さんは確かにそう言ったんだ」の口論になったいきさつがあった。私は佐藤健ならそう言ったんだらうと思った。健さんは仏教に関して博識ではあったが仏教者ではなかったから。そしてその徹底した在世振りがよいところでもあったのだから。

萩尾記者に対して生前、死を覚悟してからの佐藤健は俺の後継者として育つかも知れないと言っていた。萩尾の今日の記事を読む限り、素材の引つ張り出し方はむしろ佐藤健よりも適確である。きちんとした俗人振りも匂ってくる。あとはどう書き進めてゆくか、ここ二年の研鑽振りを見せて貰いたい。

同じ毎日に磯崎新横浜トリエンナーレ・ディレクター辞任、川俣正後任に就任の記事があった。その小さな記事だけで日本の美術界の停滞と、俗ではあるが小じんまりとした保守化の動きがうかがえる。磯崎のアンテナが横浜からの脱出をうながしたのだろう。朝日には読むところがなかった。

早朝、眼覚めてしまい山本夏彦の「一寸さきはヤミがいい」再読。山本夏彦八十八才、佐藤健六〇才。二十八才の生きた年月の開きを痛烈に想う。長生きはそれだけで智恵の表現である。